

神戸山岳会 月報

昭和 53 年 8 月 31 日



No.84

昭和 52 年 8 月 三ノ窓

発行 神戸山岳会
神戸市生田区中山手通 1 丁目 105 の 9 前田方
編集 植原・田中・神田

原稿提出先

植原清明	〒676-01	高砂市阿弥陀町阿弥陀1269の1
星野辰也	〒655	神戸市垂水区塩屋町平尾19 川重寮

＝ 目 次 ＝

冬 山 偵 察	幸 内 義 孝	1
---------	---------	---

冬 山 合 宿 報 告

A 班	幸 内 義 孝	1
B 班	神 田 章 吉	2
α 米、ベミカンについて	神 田 章 吉	5

個 人 山 行

乗鞍岳スキー行	星 野 辰 也	7
南アルプス荒川三山・赤石岳・大沢岳	神 田 章 吉	8
春の仙丈岳	星 野 辰 也	12
山上ガ岳から前鬼縦走	矢 木 研 三	14

例 会 報 告	神 田 章 吉	16
---------	---------	----

扇ノ山 53年3月19日	矢 木 研 三	17
(日曜)例会		

昭和53年度総会報告		17
------------	--	----

編 集 後 記		18
---------	--	----

冬 山 偵 察

南アルプス 赤石岳～大沢岳

幸 内 義 孝

昭和52年11月3日～5日 メンバー 野上①, 内藤①, 幸内

11月3日(晴)

畑薙ダムより樫島^{さわらじま}へは、美しくきれい。赤青黄白と美そのものだ。樫島から赤石小屋の美と静かさとで、この身が何であるかを考えさせられる。

11月4日(雪)

5:00 出発 昨日迄雪の“ゆ”の字もなかったのが、朝起きると、白一色。赤石岳頂上は寒くてたまらなかった。というのはヤッケ、アイゼン、ピッケル、何もなかった。その上、手袋も、毛のシャツも着ていなかった。もうソウナン一歩手前だ。赤石小屋があったので助かったようなものだ。迷いに迷って、百間洞小屋に着く。

11月5日(雨のちくもり)

雪の中をラッセルして大沢岳へ。それから、日がなかったので下山。帰りには晴天になり、紅葉と白とが美しく、優美にそびえ美しいの、なんのって、表せない。原生林も又、美そのもの、秋の南アルプスへ行って見たら！最高。

冬 山 合 宿 報 告

冬山合宿は、下記のとおり、A班B班に分かれて行われました。

南アルプス 赤石岳～茶臼岳縦走(A班)

幸 内 義 孝

昭和52年12月29日～昭和53年1月8日 メンバー 幸内, 田中, 相馬, 田村, 野上①, 乾

目的：冬の南アルプス南部概念把握

日程：12月29日大阪—12月30日（晴）畑薙ダム（8：20）—畑薙大橋（11：00）—
樫島出合（13：20）—樫島（14：10）

12月31日（雨）4：00起床6：00出発の所、雨のため沈殿

1月1日（くもりのち晴）樫島（6：15）—赤石小屋（12：48）—富士見平（14：35）

1月2日 富士見平（7：30）—小赤石岳頂上（11：20）—赤石岳頂上（12：15）
—百間平（14：30）—テント場（15：50）

1月3日（雪）テイタイ

1月4日（曇）出発（8：00）—大沢岳頂上（11：00）—中盛丸山（12：00）—
小兎岳（13：30）—兎岳頂上（14：35）—兎岳小屋（14：55）

1月5日（雪）テイタイ

1月6日（雪のち晴のちガス）出発（7：30）—兎岳聖の科尔（8：45）—聖岳頂上
（11：15）—聖平（13：31）—上河内岳樹林限界（15：30）

1月7日（地風雪）出発（7：30）—上河内岳（10：00）—竹内門岩（10：30）
—茶臼小屋（12：17）—畑薙ダム（18：00）赤石温泉

1月8日（晴）赤石温泉（10：30）→ 帰神

赤石岳への登りは樫島より耐えることのみだ。ただ東尾根の岩峰は、大きなザックではしんどい。だからサブで登り、フィックスをすれば行けるだろう。40 m位だ。天候の悪い時は踏みはずしに気をつけよう。赤石岳の頂上付近は二重尾根なので、よく地図を見て進み、科尔迄の下りは400 m位いの下りで、スリッパに注意しよう。

百間平でガスの場合には気をつけて。大運動場のような所だ。天候がよければ別にといいところ。大沢岳の登りもスリッパに注意しよう。聖岳への登りは、ヒザ迄のラッセルで、木にあまりながら登るので、ナダレに注意して、なるべく直登した方がいい。上河内岳も大したことではなかったが、広いので、よく地図・磁石を見ることが必要だ。僕自身大変憶病なので一人ではとてもじゃないが行けそうもない。まだまだ、先輩におんぶしてもらっているようだ。この辺で度胸だめしに一度単独冬山も行かなくては、と思った。

今度は大変長く山にいた。ラッセル、風、ガス、といろんなことを体験できてよかったと思う。

北アルプス、白馬岳～唐松岳縦走（B班）

神 田 章 吉

昭和52年12月28日～昭和53年1月16日

メンバー；CL 三浦，SL 星野，神田

日程 12月28日 大阪 〰〰〰

12月29日 〰〰 白馬大池 — つがの森 — 乗鞍岳 — 白馬大池 ♪

12月30日 ♪ — 白馬岳 — 白馬山荘

12月31日 }
1月 1日 } 沈殿
1月 2日 }

1月 3日 ♪ — 杓子岳 — 鍵岳 — 天狗山荘

1月 4日 ♪ — 不帰ノ嶮

1月 5日 ♪ — 唐松岳 — 唐松山荘

1月 6日 ♪ — 八方尾根 — 白馬駅

行 動 記 録

12月29日（快晴）

親ノ原スキー場（8：00）— つがの森（9：15）— 乗鞍岳（13：25）— 白馬大池小屋（14：00）

白馬大池の駅より三浦さんの友だちに自動車で親ノ原スキー場まで送ってもらう。リフトをのりつぎ、つがの森まで。ヤッケやスパッツをつけ出発。快晴で風一つない。ずっとラッセルの跡があり、つば足でゆく。

しかし、夜行の疲れが出てか、しんどい。汗だくだく。遠く五竜、鹿島、近くには白馬三山、不帰ノ嶮が白く、まぶしく、そそり立っている。

天狗原に出ると、風は強まり出す。名古屋山岳会の15人パーティーに会う。

乗鞍岳は、露岩の尾根を登り、除々に右にトラバースしてゆく。頂上付近の台地には、ハイマツが出ていた。それに足をひっかけながら白馬大池まで下る。

夜、気圧の谷の通過のため、強風吹きまくり、夜中、除雪を2回行なう。シンシンとふる雪が不気味であった。

12月30日（風雪のち晴）

白馬大池（10：00）— 小蓮華岳（12：00）— 白馬岳（14：00）— 白馬山荘（14：20）

夜中に気圧の谷通過。8時ごろより晴れ間見え出す。小蓮華の登りあたりより強風。下層雲海。白馬岳ののぼりは夏道が出ているところあり。20分ほど下ったところに白馬山荘があった。

剣岳、毛勝岳を見ながらボンとしゃれてむ。風もなく、遠くまで見渡せ、嵐の前の静けさで

ある。冬期小屋には、我々をふくめて、2パーティが入る。

12月31日(風雪、ガス)

朝より風吹き出す。ガスで視界悪く、一度出発するが、村営頂上宿舎の場所がわからず引返す。雪は非常にしめっている。沈殿となる。昼ごろより3パーティが入ってくる。ひまでたいくつ。

1月1日(風雪)

沈殿。温度、徐々に下ってくる。2パーティ出発するが1パーティもどってくる。そうそう、きょうは、もちを食べました。正月です。

1月2日(風雪のち晴れ間見える)

冬期小屋、満員となる。北高型の天気図になり、風、少し弱まる。腹がへってしかたがない。

1月3日(風雪、少し晴れ間見える)

白馬山荘(8:00)―鎚岳(10:10)―天狗小屋(12:10)

強風の中を出発。釣子岳は、まかずにピークをゆく。双子尾根への下りは、わかりにくい。鎚岳ののぼりは雪壁になっており、出っ歯のアイゼンが、よくきく。ガス、ガスで、どこがどこかわからず。

天狗山荘の分岐をさがしまわる。みつけて、ザイルをつけ、山荘にいたる。パウパウ雪の腰までのラッセル。冬期小屋にもぐりこむ。我々の他に六甲山友会、神鋼山岳部のパーティが入る。

1月4日(風雪のち強風雪)

強風の中を出発。時々晴れ間見えるが風雪。天狗の大下り、1峰の下りは少しやばい。2峰は氷がついており、むずかしい。壁をのぼり切れず、左側のキノコをまく。確保している足がしびれてくる。

2峰の北峰の頭あたりでビバーク。六甲山友会の2人と計5人でテントをかぶり、寒さにふるえる。足をちぢめ、靴をはいたまま強風の中で一晩中苦しむ。

1月5日(強風、ガス)

ベーコンをいため、出発。強風のため、まともに立ってられず。3峰まで雪壁多し。3峰をすぎたあたりで道にまよい、ウロウロする。視界も非常に悪い。風は、ヤッケ、オーバースボンを通して体温をうばい、食うものも食っていないため、疲労困憊。六甲山友会の人が道を見つけ、頂上へ。しかし、下りしな南にとりすぎ、お花畑の方まで下ってしまう。のぼり直して唐松山荘へ。ガスと、夜の到来のため、小屋が見えず。6時にやっとつく。唐松山荘は天国でありました。

1月6日(強風、ガス)

唐松山荘(10:00)ーロープウェイ駅(17:00)

頂上より下る。アンザイレンする。下りはじめは、岩稜帯があり、少しやばい。ガスで、視界悪く、首あたりまでもぐるところあり。(本当に今日中に下れるか心配になってくる。後立山の雪は、本当にこわい。)時おりのケルンや赤ハタの出現に安堵を感じ、感謝せざるを得ない。途中から神鋼山岳部の3人が追いついてきて、ラッセルが楽になる。八方池山荘よりもぐりが少なくなる。

リフト駅より、スキー場の中に穴をあけながら、タイムリミットの接近とともに、コロガルようにして(又、実際にころがって)ロープウェイの駅へかけこむ。

ロープウェイの、のぞき窓から見た村々の素朴な灯が、白い山間に浮び上がっていた。

α 米、ペミカンについて

神 田 章 吉

今回、軽量化をはかるため、 α 米、ペミカンを使用した。

< α 米>

市販されているものは一袋 140 g 入りで、これをたくと、約 450 g になる。ふつうの米の場合、米約 210 g をたくと約 450 g となる。ということは、 α 米は米の $\frac{2}{3}$ の重量で、その米と同量のメシがたける。(重量が $\frac{2}{3}$ になるということ)

<ペミカン>

ペミカンとは、肉、野菜などを、あらかじめ、油でいため、水分をぬき、軽量化と、いたみにくさをはかったものである。以下は、それぞれの重量をはかってみた結果である。

	最初の重量	皮をむいたあと	いためたあと	皮のしめる割合	ぬけた水分のしめる割合	計
ジャガイモ	600 g	500 g	350 g	17 %	25 %	42 %
タマネギ	600 g	500 g	270 g	17 %	38 %	55 %
肉(ブタ)	450 g	—	320 g	—	30 %	30 %

全体としては42%減となり、タマネギは水分が多くぬけるが、ジャガイモは、それより少ない。肉に関しても相当水分がぬける。

ペミカンにすると、さきに述べたことのほかに、調理の手間がはぶける（ガソリンの節約→軽量化）という長所も出てくるのであるが、栄養の点において、ビタミンなどが、こわれやすいという難点もある。（要するに、なまの食品が栄養的には一番よいのである）

軽量化をとるか、栄養をとるか、それはあなたの決意と山行形態にかかってくるのです。君は、どちらをとるか？

個人山行

乗鞍岳スキー行

星野辰也

昭和58年3月18日～19日 メンバー；三浦，星野

正月山行以来惰眠をむさぼっていたが、3月の声を聞くとなにやら身体がうずうずしてくる。3月と云えば山岳スキーにとって最適な時期であることから、どこかへ、スキーツアーに行こうと云うことになった。候補地はたくさんあるが、とりあえず手頃な所として3000mからのDown hillを味わえる乗鞍岳とすることに決った。出発前に締具を従来のワイヤー式から安全性の高いM4TRに替えた。山岳スキーにSafety付は絶対に必要なものである。

3月18日 大阪(8:30)―鈴蘭高原(15:50)―リフト終点(16:30)―位ヶ原
小屋下(18:00)

連休の混雑を避ける為に早朝大阪発のしなの5号に乗ることにした。春うららの木曽路を後に電車は昼過ぎに変身中の松本駅に到着した。昼食を食べる間もなく山屋の全くいない松本電鉄に乗り込む。電車は春の日だまりをノンビリと走る。車窓から雪は見られず、前に座った若い女性の下着の白さのみが乗物に疲れた目にしみる。新島々より最終バスにて鈴蘭高原へと向う。ほとんどがスキー客でありさすがに山へ行く者はいない。スキー場に到着後さっそくスキーを付けてリフトを4台とロープを1台乗り継いでリフト運転停止時刻ちょっと前に乗鞍高原スキー場の終点最上部に着いた。ここに数張りのテントがあった。日暮れまでまだ時間があるのでさっそくシールを付けて針葉樹林の中のトレースをたどって一路乗鞍岳へと進む。快適な登高である。1時間半ほど登ったところの標高2300m程の車道との合流点で一夜をあかすことにした。気温は比較的高く又夜半から雪となった。

3月19日 出発(7:30)―肩ノ小屋(11:00)―乗鞍岳頂上(12:00)―肩ノ小屋
(12:20)―位ヶ原山荘―鈴蘭高原(15:00)―帰神

位ヶ原への道をキャタピラーの跡を沢沿い進む。位ヶ原小屋上部はすばらしいスロープである。視界はあまり良くないが、夏道通りに見当をつけて肩ノ小屋へと向う。雪質はあまりよくないが、シールは快適にきいてくれる。肩ノ小屋までは女性も含めてスキーヤーがかなり多くやってくる。小屋にスキーとザックをデポして頂上へ向う。さすが3000mの独立峰である。強風で顔の感覚がなくなって来たころ頂上の祠に着く。多分こんな機会でもないかぎり乗鞍の頂上を踏むことはないと思う。なにも見えないため一服した後早々と下山する。肩ノ小屋でス

キーを付けて滑降の準備をするが当初平湯へ抜けるつもりで準備して来た装備が肩に重い。クラストした斜面を位ヶ原小屋へと滑降する。さすがに山スキーのメッカであり小屋はスキー客で一杯である。3000mの山へ、お嬢さんがシールを付けて登る時代である。少休の後車道沿いにぐんぐん下る。昨日のテント場より登りとは逆に左に降りる。尾根通しに鈴蘭高原へ到着する。一服した後タクシーで松本へ下る。早春の短い山とスキーの旅であった。

南アルプス荒川三山・赤石岳・大沢岳

神 田 章 吉

昭和53年3月21日～27日 メンバー；神田

行動日程

3月21日 大阪 ————
22日 ——— 身延 — 田代入口 — 八丁峠
23日 ♪ — 転付峠 — 二軒小屋 — 1700m付近
24日 ♪ — 千枚岳手前
25日 ♪ — 千枚岳 — 荒川三山 — 荒川小屋付近 ♪
26日 ♪ — 赤石岳 — 大沢岳
27日 ♪ — 大沢渡 — シラビソ峠 — 飯田

行 動 記 録

3月22日（小雨のちくもり） 田代入口（12：40）—ダム（13：30）—八丁峠（15：15）
単調な林道。空は曇りにて、うっとおしい。ミキサー車が往来。登山者一人に会う。塩見の方から来たようだ。

途中、道はずし、ガレガレのルンゼに入りこみ、四苦八苦する。足がいかれてズルズルすべるし、下まで落ちそうで、もうどうしようかと思ったけれど、左へ左へとトラバースし、道を見つめる。まったくばからしい。

八丁峠にテントをはる。狭いところだ。おそくまで胸が圧迫されて、ねつけない。一人で山へ来ると、最初の夜はいつもこうだ。

そして、一人で来たことを後悔する。

3月23日(晴) 八丁峠(6:30)―転付峠(10:25)―二軒小屋(11:50)―

1700m付近(13:00)

朝起きてみると星空だ。気持ちもはれ、出発。クラストしている。晴れて、荷が重く、汗ダクダク。なぜか、いつもとちがいで体がだるく、足に力が入らない。とっても苦しい。

ハタとふり返ると、富士山は、すぐ手のとどきそうなところに、そそり立っている。何度もふり返って見る。ただ、ただの登りなので、転付峠とはどういう意味かなとか、考えて歩く、転付峠付近は、少し雪が深く、ラッセルさせられる。

しばらく行くとラッセルなくなり、ジグザグな、急な斜面についている道を走るように下る。2回こけてヒヤリとする。

二軒小屋についてみると、やはり誰もいず、明るい雰囲気にもかかわらず、不気味な感じがして、すぐ立ち去る。

千枚へのとりつきの標しきより登り出す。トレースはないが、なんとか夏道どおしに赤布、赤テープなどに導びかれて急登をたどる。1700m付近でサイト。樹林帯なのでブロック作らず。

3月24日(晴) 1700m付近(6:45)―ロボット測量計(9:00)―マンボー沢の頭(11:20)―コル(13:30)

樹林の中を進む。雪は板状雪、下の層は不安定だ。くるぶしあたりまでもぐる。クラストしていたり、やわらかかったりで、つかれる。

白き峰々は、まだ私の目の前に姿を現わしてはくれない。

ロボット測量計をすぎたあたりより相当もぐり苦しいが、ついに赤石、聖が青空のうしろだののもとにそびえているのが目に映った。登高意欲がそそられる。

マンボー沢の頭手前よりアイゼン、ワカンの併用を行なう。マンボ駅の頭より、ナイフエッジが多く出はじめ、雪も不安定で苦しむ。風は樹林帯なので、ほとんどナシ。

3月25日(晴) コル(5:50)―千枚岳(7:50)―悪沢岳(10:00)―中岳(11:25)―荒川小屋直上のコル(12:30)

アイゼン、ワカンの併用をする。雪が多くクラスト。千枚ののぼりでワカンはずすが、けっこうもぐって苦しい。「何がアイゼンが快適にきしむ斜面だ。」と、斜面をののしりながら歩く。(某、ガイドブックによれば)

千枚岳のピークからは、360度のパノラマだ。ヤッホー。千枚岳からの下りにトレースあり。3ヶ所ほど岩稜帯が出てきて緊張する。

悪沢岳までは、広い、なだらかな斜面をのんびりと行く。風が強く、ほおを打つ。

一番心配していた悪沢の下りにさしかかる。最初、夏道ぞいに下り、そのあと急な雪壁を、アイゼンのツアッケを十分にきかせながらそそくさに下ろうとする。コルには、テントが見え

る。横にはってあるフィックスザイルを横目で、うらめしそうにみながら、忍者のごとき(?)すばしこさでもってコルにたどりつく。

テントには、だれもいず。雪で半ばつぶれているし、テントのまわりには、トレースもないし、中をのぞいてみると装備がごっそりおいてある。(雪は4日ほど前にふったのだけれど)中の人、いずこへ。(4日ほど帰ってきていないことになる。)信州大山岳部とある。中岳までは、両方ともスッパリと切れているところが多く、あまりいい気持ちはしない。中岳あたりは、広いゆるやかな斜面。前岳を越え、岩稜帯を下る。ルートを、めちゃくちゃにとったため、悪沢岳の下りより、こわい思いをさせられる。

二重稜線の間でテントをはる。いやらしい雲が出てきたので、ゴッソリほりぬいて、テントをスッパリとうめこむ。さあ、何でもこい。

3月26日(強風、ガス、のち晴) コル(6:15)―赤石岳(9:50)―百間洞(11:40)
―大沢岳(15:00)―大沢岳より西にのびる尾根上2500m付近(15:30)

朝方ガス、強風。大聖寺平付近は本当に風が強い。何度もふきとばされそうになる。クラストしていて、アイゼンがよくきく。

小赤石岳ののぼりは急で、ジグザグに登り切る。晴れ間見え出す。ここより、ガイドブックのとおり、大きな雪ピが、ニョキニョキと不気味に奥西河内沢側にとび出していて、ぼくをおとし入れようと待ちかまえている。(2~3m)

赤石避難小屋は、雪にうもれているが、十分使える。ここより岩稜の左手をまくように下り出す。少しずつ右へ、トラバースし、コルに達する。いやなトラバースだ。クラストしているから、アイゼンは、よくきくが、少しでも足をすべらしたら奈落の底まで直行である。

コルでアメをほおぼって力をつける。百間平まで、またまた両側がよく切れている。百間洞付近は、だだっ広くて気持ちがよい。下りは、視界がよくても、ややこしい。

コルより、ラッセルとなる。しかし風は弱まり、ポカポカ陽気になり、ピクニック気分。ほぼ稜線づたいに大沢岳に至る。急な斜面である。ジグザグ登高。

大沢岳を越した下りで一度スリップ。ヒヤリンコン。どうも足がふらつく。

きょうは、このあたりでテントをはって、あすは聖岳を越える予定であったが、今回、どうも体の調子が、おもわしくないようなので、大沢岳より西にのびる尾根から下ることにする。そう決めると、いてもたってもたまらず、どんどん下る。この尾根の上部は、非常に急で、下りに使用するのには、あまり適していない。木にぶらさがりながら下る。ひっくり返ることひっくり返ること。300mほど下ったところの樹林帯でテントをはる。

山での最後の晩の予定なので、コンロを、どんだんたく。胃の調子は、山行中、ずっと悪く、今晚はムカムカして、はきそうだ。

「あすは、山をおりて」を一人口ずさみ、寝る。星空が本当に美しい夜だ。樹林の間から、月がテントを冷たく照らし出す。この山の世界に息ずいているのはぼく、ぼくがたった一人だ。

3月27日（晴のちくもり） 尾根上（6：30）—唐松小屋（8：45）—大沢渡（10：00）

—しらびそ峠（14：00）—飯田駅（18：00）

朝起きる。静かだ。何も聞こえない。沈黙の世界。どんどん下る。ワカンをつけてゆくが、ところどころ氷がはっていて、いやなところが4～5ヶ所でてくる。

唐松峠をすぎ、下りに下ってワカンをとる。もう小鳥のさえずりさえ聞こえ、あたりには、春の呼吸がただよっている。

大沢小屋は、りっぱで十分使える。

大沢渡より、北又沢にそって林道を下るが途中ガケくずれのため通行止めになっておりガックリ。もう一度、高度差にして600mほどのぼり直す、シラビソ峠越えとなる。シラビソ峠には、林道が入っており、むかしの峠のイメージは、みじんもない。このあたりより、もう胃の調子の悪さがつのも、はきそうになる。オエ～。

しばらく林道を行ったところで、自動車にひろわれる。山づりにきた2人づれで、そのあと酒やメシをおごっていただき、飯田の駅まで送っていただく。そこで、お礼をいって別れ、列車に乗りこんだ。あすは、気象通報で有名な、御前崎に行くつもりだ。その夜は静岡駅の少し先の菊川駅というところにとまる。

3月28日（雨、ザザブリ）

朝起きて、バスで御前崎の灯台に向う。（人間とは、おかしい動物だ。一番はし、出っぱったところに、無性に行きたくなる。）

いざ、ついてみると、何と、きょうは雨のため、灯台はしまっている。それに加えて、このあたりの観光化されていることといったら……。一日、海岸でのんびりしてこようと思ったのだけれど、あまりに俗化されていることや、雨がザザブリなこともかさなって、うんざりして駅に引き返した。

去年、奥美濃へ行った帰りに寄った敦賀湾の感傷的な、快いけだるさをもった思い出を心のどこかに暖めながら、今回、御前崎にやってきたのだけれど……。やはり、受動的な楽しみとは、うつろいやすい、偶然的なものなのだろうか。

駅の近くの飲み屋で、待望の一ぱいをやって、大阪へ向った。飲んだビールが、心もち、ホロにがく、舌にのこったけれど。

春の仙丈岳

星野辰也

昭和53年4月29日～5月2日

山々にはその本来持ちそなえている容姿とともに、その季節に応じてのさまざまな顔がある。桜も散った後、新緑の美しい春の日に街中でふと思うことは、やはり残雪のアルプスの峰々である。今年は久しぶりに一人でフラリとこれらの山々へ行ってみようと思う。そこで思いついたのが仙丈岳より塩見岳へのコースである。しかしこれは例年より1～1.5m多い積雪と日数の関係で途中で下山せざるをえなかったのは残念であった。

4月29日(雨) 伊那北(7:30)―戸台(8:30～9:10)―角兵衛沢出合(10:40)―丹溪小屋(11:10～11:40)―北沢峠(13:35)―北沢テント場―(14:00)

最近の電車は比較的すいている。今回も発車ギリギリのちくま3号に乗ったが、ちゃんと坐れた。連休の天候はどうもいま一つのようなのである。トイメンは熊の湯へ一人でスキーに行くと言う姫路のおじさんである。一人旅は色々な人と話が出来ておもしろい。この方は夏には山へも登るそうで、地元の雪彦山の話をしてたりした。気のよい人だが連休でもちゃんと女房・子供をほったらかして一人でスキーに行くなどなかなか見上げたものだ。

塩尻、辰野と乗り継いで、伊那北へ着く。ここからのバスの連絡は、すこぶる悪く、タクシーで行くことにする。しかし一人では不経済なので廻りを見回すとそれらしき人が数人いるのでさっそくオルグして結局4人で行くことにした。戸台まで一人頭1,080円でバスとequalentである。

丹溪小屋に登山者カードを提出したら、おっさん曰く、今年は雪も多く仙丈小屋は使用不可であり又仙丈岳を越えて行く者は今まで一人もいないからやめた方がいいだろうとのことである。まあその時はその時と思い雨の中、一路北沢峠へと向う。この道はまだ2回しか来たことがないのに何故か何度も通ったことがあるような気がする。南アの持つ味がそうさせるのかも知れぬ。角兵衛沢出合までの道は以前と比べ大部変った。ジープならば、なんとか丹溪小屋まで入れそうである。小屋の前で一服後、八丁坂の登りに向う。ここらあたりから積雪をみる。八丁坂上部で東京から来た2人連れの女性といっしょに行く。これが世間によくあるpatternで一人は美人でもう一人は $\dot{\bigcirc}\dot{\bigcirc}$ である。なんでも2人して仙丈岳を登るとのことであるが、一人は雪道にもかなり馴れているらしく凍った坂道でも歩くのがうまい。しかしダメの方はまったくなをやってもダメと云う感じで見ていてもハラハラする。とうとうアイゼンを付けることになった。待っていてもよかったが先に行くことにする。北沢峠では小屋も営業している。峠での積雪は1～1.5m程度である。峠より約500m程下った北沢のテント場にツェルトを張

る。あまり美しくない場所だが、水がいくらでもあるのと、土の上で寝られるので我慢する。夕方、ちゃんとテント代150円を徴収された。明日の天気は悪そうである。シュラフの中でウトウトしていると隣のテントに女性が火傷の葉がないかと尋ねている。声の主は八丁坂の美人である。なんでも友人が火傷をしたらしい。テントの主曰く、熱湯による火傷なら前の沢の水でどんどん冷せば治るというのである。お嬢さんは雨の中でそんなことすれば火傷が治る前に風邪をひいてしまうと、傷ついた友を心配しつつテントへ戻って行った。多分仙丈へは登らずに帰るような気がする。partnerが悪かったという感じである。

4月30日(雨) 停滞

朝から小雨が降っており仙丈小屋も雪で使用不可能とあってはここで雨があがるまで待つしかない。午後になってやっと雨はあがったが空はどんより雲っている。

5月1日(晴) 北沢(6:30)―小仙丈岳(9:00)―仙丈岳(10:05~10:40)
―野呂川乗越(15:55)―両俣小屋(17:00)

北沢峠から仙丈岳までは約1000m余りの標高差がある。ノンビリと樹林帯を行くと左手に北岳の雄姿が望まれる。振り返れば、摩利支天峰の異容な姿と、3年程前に登った鋸岳が望まれる。北岳はスッポリと雪の衣をまとっているが不思議と甲斐駒、鋸岳は雪がほとんどない。標高2,500m余りの森林限界を越えると前方に小仙丈岳の真白い姿が現れる。仙丈岳はその女性的な容姿の通りルートは非常に容易であり、初心者向で北沢から山頂までは南アとしてはかなりの人である。しかしさすが仙塩尾根(馬鹿尾根)へ行く者はほとんどおらず、トレースを見ると1~2名があるのみである。山頂で一服していると、単独の方が馬鹿尾根へ行くらしいので一緒に行くことにする。大仙丈岳までは比較的楽に進んだが森林帯に入ってから膝上までのラッセルには大いに閉口する。ハイ松の上を渡ったりメチャクチャ進む。伊那荒倉岳で間ノ岳からの5人パーティーと合う。話によると野呂川乗越から三峰岳間をもっとひどいらしい。5人のトレースがあっても状態は全然好転せず、ようやく野呂川乗越に到着する。この頃、空模様も大部怪しくなってきたので両俣小屋へ一気に下ることにする。雪に足をとられながらようやく両俣小屋に到着する。小屋付近でも積雪は1m以上ある。両俣小屋は野呂川沿いのいかにも南アらしい小さな小屋である。裏側には水場もあり又ススケた自在鉤がいい。今晚の宿泊者は4名である。僕以外の3名はいずれも単独で南アへ年中来る者ばかりで、仙丈よりの同行のK氏は仙丈だけでも今回7回目ということである。

5月2日(晴) 両俣小屋(9:00)―北沢橋(13:45)―広河原(14:25~15:00)
―夜叉神峠(18:30)―甲府

明け方寒冷前線の通過で雷を伴ったすごい雨が降った。しかし小屋泊りのありがたさで、なんともない。雨が上がった後一人は北岳へと向う。一人はもう一日小屋に停滞するらしい。

我々2人は広河原へ下山することにする。小屋より1時間程野呂川沿いにラッセルしながら進むと林道にでた。ここから北沢橋までガケ崩れだらけの林道を行く。広河原までと単調な林道を歩く。スーパー林道には車も入っており、多分バスもあるだろうと思いつながら広河原ロッジへ行き、おばさんに聞くと何とバスは入っておらず、又、タクシーも6時以後でないと入れないとのことである。仕方なしに夜又神まで歩くことにする。まる一日林道を歩くなどこれが最初であり又最後でありたいと思う。同行のK氏も大部まいっているが、こうなったら意地でも歩いてやろうと思う。約3時間半で夜又神峠へ到着した。最後の1,700mの真直ぐな明り一つない夜又神トンネルをヘッドランプなしで歩いたことは、善かれ悪しかれ一つの思い出となるだろう。小屋でうどんを食べていると、やっとタクシーが来た。峠よりの甲府の街明りが歩き疲れた我々には唯一のなぐさめであった。甲府であずさ8号に乗り、松本よりちくまにて帰神する。

山上ガ岳から前鬼縦走

矢 木 研 三

昭和53年5月1日～5月4日

あべのに6時少し前に着く。特急電車の始発が7時、弁当を買ったり手洗に行ったりと時間をもてあます。下市に着く迄の間に朝食に買った弁当をつかう。洞川に着いてライトの予備電池を買う。水筒に水を満して服装をととのえたと山上ガ岳をめざして歩き出す。(11時10分)。清浄大橋のあたりで雨がパラツキ出す(この空もようは、降ったりやんだりで小笹ノ宿に着くまで続く)大橋を渡ってやっと登りらしい道になった所で昼食にする。一ノ世茶屋でビン入の飲料水でのをうるおしながら茶屋の主人に上の様子を聞く。今年は雪も少く、ルート上には残ってる所は無いとの事。一本松茶屋の少し手前で晴間が顔を出す。コブシの白い花が廻りの緑に調和して美しい。洞辻茶屋で身体の汗をぬぐうと写真を1枚撮る。鐘掛岩へ着く手前の岩場に一寸だけ雪が残っている。鐘掛岩の半分ぐらい迄攀てみる。うしろを廻って岩の上に立つと山上ガ岳の宿坊が谷をへだて、すぐ向うに見える。大峰山寺を霧の中にファインダーを通してとらえたのが最後—36枚撮のフィルムが入っているものと思っていたのが、実は12枚撮で、それも8枚が使用済み—以後の山行はカメラは使用出来なくなる。洞川で電池と一諸に買って置くのだったと思っても後のまつり。フィルムと交換に手にした様な晴天が以後の山行中ずっと続く。うすく霧のただよう中、今夜の宿泊地小笹に到着(16時40分)。幸内氏に借りて来たテントの良さを改めて思う(設営時間が短い事が此の後も時間短縮に大いに役立った)。

5月2日 小鳥の鳴声で起き出して、食事を終えてテントをたたみ、荷をまとめて出発(6

時30分)。女人結界のある奥駈道分岐を過ぎ小普賢の登りあたりから風が強くなる。おかげであまり汗をかゝずにすむ。山上ガ岳から大普賢岳までの間、数ヶ所に残雪がある。国見岳の岩峰で栈道が今にもくずれ落ちそうな所が2ヶ所ほどある。行者ノ零水の水場を経て、もうそこが小屋という所で小屋の管理人に会う(一昨年弥山からの降路、一夜お世話になった時とあまり変ってない様だ)、小屋で湯を一杯よばれて、しばらく話し込む。

一ノ峠の避難小屋に着いた時、1人の登山者が入れかわる様に弥山方向へ出発してゆく。湯をわかって紅茶を入れ昼食を取る。石休ノ宿あたりで先に出発した人に追いつく。聖宝の宿跡で一休みしてミカンを食べて最後の登りにそなえる。石休ノ宿で追越した人の姿が木間がくれに見え出した頃腰を上げる、聖宝八丁の登りはいたる所に残雪がある(一昨年此の道を降りる時にはどこにも残っていなかった)。弥山小屋に着いたのが3時半、それから1時間もして追越した人が着く、登りと、残雪にだいぶなやまされた様子であった。

5月3日4時45分起床 国見八方腕のテント場は見晴の良い台地だけあってか風も強く、昨夜はよくひえたとみえて、テントの外に水をくんで置いたバケツの水が凍っている。篠原分岐迄は霜柱が足下でくづれる音と感しょくを楽しむ。八経ガ岳を下るあたり迄は雪もかなり残っている。舟ノ峠を過ぎてガラ場を2カ所ほどトラバースして屋根を下るとポツント楊枝ガ宿小屋が立っていた。ルート図には水場と印してあるが使用出来るほどの量がない。此々から始まる登りを息を切らして一回も途中休まず孔雀覗きに出る迄登りつづける。ガイドブックに「前鬼川の源流を脚下に「五百羅漢」といわれる奇岩の散在を俯瞰する。正に胸のすく絶景、一服の清涼剤といってよい」とあるが、正に上記の通りである。それにつけてもフィルムのないのが残念である。天候と絶景が一諸の山行はそう多くあるまいと思えばなおさらである。釈迦の銅像が頂上中央に安置されている釈迦ガ岳の眺望もまた素晴らしいものであった。深仙の宿に着くと(12時35分)すぐ水場に直行、ポタポタと落ちる水の滴をコツフェルに満すのに30分近くもかかる。紅茶を入れて昼食を取る。太古ノ辻を過ぎて背くらべ岩に着く、今日の行程もあと1時間程、ミカンでのどをうるおすと腰を上げる。此々から前鬼迄はガラ場と竹ヤブの下り道、15時20分に宿坊の前に到る。前鬼の宿のテントの中でウイスキーの水割を飲み、暮れなずむ大峰の山波をながめながらラジオから流れる唄に耳をかす。中でも岩崎ひろみの明るく楽しい歌が、明日で今回の山行を終ろうとしている私の気持と対象的で心に残る。

5月4日 いよいよ下山の日である。テントをたたみ、荷造を終えてから朝食を作る。6時35分出発、時間つぶしに林道のワキにはえているいたどりをつまみながら歩く。前鬼口のバス停からバスに乗り込んだ時に今回の山行は終わった(10時40分)。

例 会 報 告

(1 月 ~ 6 月)

神 田 章 吉

1 月 2 2 日 (日)	保壘岩 R.C.T.	CL 相馬
1 月 2 9 日 (日)	百間滝 (氷瀑登り)	CL 星野
2 月 5 日 (日)	伊吹山 (スキー)	CL 幸内
2 月 11.12 日 (土 . 日)	氷ノ山 (スキーツアー)	参加者ナシ
2 月 1 9 日 (日)	比良山 (スキーツアー)	CL 田中
2 月 2 6 日 (日)	妙見・ソ武岳 (スキーツアー)	参加者ナシ
3 月 5 日 (日)	比良山 (スキーツアー)	参加者ナシ
3 月 1 2 日 (日)	菊水山—摩耶山 (歩荷)	CL 矢木
3 月 2 6 日 (日)	京都北山	CL 幸内
4 月 2 日 (日)	保壘岩 R.C.T.	CL 宮本
4 月 9 日 (日)	妙号岩 R.C.T.	CL 星野
4 月 1 6 日 (日)	石峰寺	CL 幸内
4 月 2 3 日 (日)	担馬千ガ峰	参加者ナシ
5 月 1 4 日 (日)	柚谷—保壘岩 R.C.T.	CL 神田
5 月 2 1 日 (日)	比良山 (沢登り)	CL 幸内
5 月 2 8 日 (日)	大杣池—石峰寺	CL 神田
6 月 1 1 日 (日)	百丈岩 R.C.T. 雨のためテントでたむろする。	CL 幸内
6 月 1 8 日 (日)	三尾山 R.C.T. 自動車 2 台で前夜よりくり出す。次の日、岩をさがしながらブッシュをこぐ。下におりて、ゆっくりする。	CL 幸内
6 月 2 5 日 (日)	石切場 (確保練習) 雨の中を、古タイヤを使つての確保練習。そのあとアブミの練習。	

扇ノ山 53年3月19日(日曜)例会

矢 木 研 三

前夜10時、国鉄宝塚に集ったメンバーは、当番の神田氏と幸内氏に私、矢木の3人。

車中では八北ヘスキーにゆく相馬氏の一行も途中迄一語で山の話、スキーの話、はては女性の話とアルコールが入ったせいもあって大変楽しいものになる。

鳥取で列車を降りると、駅前にある日交のバス乗り場のベンチで一番バスが出る迄の数時間シェラフ・カバーに入って仮眠する。

大石の部落でバスを降りると、廻りは一面の雪、部落をはずれて、一寸登った所に有る神社の前でスキーをつける。

広くて緩やかな斜面の丘がいくつも連なっている様な尾根を登ってゆく。曇り空ながら、まずまずの天候、主稜線に出た所で時間切れとなり下山に移る。登りながら「この斜面を滑降する時が楽しみだ」と思った場所で天候が悪化、ガスがあたりを包んで足もとのスキーの跡がやっと確認出来る様な状態になり楽しみとは程遠いものになる。それに加えて高度が下るにつれて雪もクサッテ、思う様にスキーが動いてくれなくなる。

今回でスキーをつけての登山も3回目、最初より多少うまくなったといっても、荷を背負ったの滑降は思うにまかせず、転倒でついやす時間が滑降のそれを上まわっている。

スタート地点の神社の前に着いた頃から、雨が降り出す。行動中でなくて幸いであった。

昭和53年度総会報告

登山研修所にて、1:30PMより行なわれました。リーダー会のあり方などについて、活発な意見のやりとりも見られました。

昭和53年度役員は以下のように決まりました。

委員長：岸本光弘

副委員長：梅原慶彦

企画：三浦，幸内，神田

庶務・会計：梅原，萩本

装備：星加，幸内，神田

月報：植原，星野

よろしく、お願いします。

= 編 集 後 記 =

冬合宿のあと、1月、2月は例会が、どうも低調であり、参加者なしというのもありました。

3月、5月の連休も同様に、個人山行をするものが、例年に比べ少なかったように思われます。これは、現在、動いているメンバーが少ないこと、休みがとれなかったことなど、いろいろな要因が、かきあったことかもしれませんが、やはり、K・A・C・自体の低調さを物語っているのではないかと思います。

しかし、5月より新しいメンバー3人を加え、又、この1年間、随時新人募集をするということで、はば広く山行を精力的に行なおうとしています。

老若を問わず会員の皆様、どんどん山へ行って、記録、随想、何でもけっこうですからお送り下さい。(自称“筆不精”の方もよろしくお願いします。)

(A.K)

